

学校図書館 Take Off!

No.14



本号の目次

トピックス	子どもゆめ基金助成事業報告	P2~3
	広瀬恒子さん講演会 『子どもの本を読みましよう』	
	堀川照代さん講演会 『子どもが本と出会う場所』	
連載	『教室での読み聞かせ』会員のおすすめの本	P4
	『ツバメ号とアマゾン号』から思い出すこと』志々目彰	P5
活動報告	学校図書館見学会レポート	
	市立由木中学校 ・ 市立柏木小学校	P6
	杉並区立済美教育センター学校図書館支援室	P7
お知らせ		P8

一年生の教室で、NHKの「おはなしのくに」のビデオを見ていました。その作品は大人から見てよくできたものでしたが、途中から、半分近くの子がそわそわと落ち着かなくなりました。しかし、テレビ番組はそんな状況とは無関係に流れていきます。ベテランのストーリーテラーが子どもたちの目の前でやっているとしたらどうするでしょうか。

学校の学習で、自分の課題をインターネットを使って調べる場面があります。キーワードを入れて検索するのですが、その情報量といえは莫大です。そして難解です。小学生には、ほとんど使えないものがあります。小学生用に十分精査されたものを採るのは、専門家でないとなかなか難しいのです。学校図書館を考えてみても同じことが言えます。学校での文化知識の宝庫である図書館も、専門の司書がいることで、どれだけのものを子供たちの前に引き出せるか。

(本会代表 宮本茂)

八王子に学校図書館を育てる会広報紙
二〇一四年三月十七日発行 第十四号

トピックス 子どもゆめ基金助成事業報告

講演会『子どもの本を読みましょう』

平成二十五年十月十九日 八王子中央図書館

講師 広瀬恒子さん

(親子読書地域文庫全国連絡会代表)

まず、最近の子どもの本の全体的動向として、家族や友達との人間関係の中でというより、たべもの・職業・仕事などの具体的事物に引きつけて子どもの成長を語る傾向があるとの指摘がありました。

『じったんのオムライス』(大久保美行・著、くもん出版)、『オレたちの明日に向かつて』(八束澄子・著、ポプラ社)、『ジャコのお菓子な学校』(ラッシエル オスファテール・著、文研出版)、『林業少年』(堀米薫・著、新日本出版社)、『ぼくは、いつでもぼくだった。』(いっこく堂・著、くもん出版)などの児童書作品、また絵本では『えんそくごいっしょに』(小竹守道子・著、アリス館)、『だるまのしゅぎょう』(ませぎりえこ・著、偕成社)など、小学生にすぐにでも読んであげたいような楽しい作品の紹介がありました。

『炎路を行く者』(上橋菜穂子・著、偕成社)、『八月の光』(朽木祥・著、偕成社)など、中学生に、人

生や社会を見つめるきつかけとなるようにすすめたくなる作品の紹介もありました。

その他にも魅力ある作品について、広瀬さんは、自らの思いを込めてたくさん語ってくれました。その思いをたっぷり受けた私たちは、それを子どもたちへという思いをつのらせて会場を後にすることができました。(島崎 滋)

講演会「子どもの読書を支える学校図書館

『子どもが本と出会う場所』

平成二十五年十二月七日 八王子中央図書館

講師 堀川照代さん

(青山学院女子短期大学教授)

アメリカの学校で子どもたちに「学校図書館は何をするところですか？」と尋ねると、「何かを調べるところ」という答えが返ってくるそうです。学校図書館はなぜ必要なのかを考えるうえで、「読書」＝「文学作品」だけではなく、「読書」＝「もつと広い意味での本や資料と関わること」への視点の転換。ここから堀川氏のお話が始まりました。

それでは日本の他の自治体ではどのようにして学校図書館を活性化させているかという実例をビデオで見せていただきました。島根県松江市立(元東出

雲町立) 揖屋小学校。「ね、田舎でしょ！」という堀川氏の言葉を聞きながら見始めた映像には、学校図書館での担任と司書教諭と学校司書のTT授業が展開し、子どもたちの生き生きとした学びの姿がありました。そこでは授業の流れを作る担任と情報リテラシーの専門家の司書教諭と共に、情報の専門家である学校司書が、個々の子どもたちのニーズを探り、対応していました。それは一人ひとりの子どもたちのテーマや進捗状況を見守り、書



きとめ、その学びを進め、子どもが今学びのどこにいるかを、子ども自身も授業に関わる大人も把握していく授業でした。学校図書館を学校経営の核として、プロセスを大事にする探究型の学習を進めることで、一年生から調べることを教えていき、読む力と自分で考える力を育てていく実践です。堀川氏の

「あきらめない子が育った」という言葉が心に残りました。

学校図書館が「読書センター」だけでは学校の中に公立図書館があるにすぎない、「学習情報センター」としての働きをすることを学校全体でめざしたという揖屋小学校の紹介に続いて、OECDのPI SA調査についてのお話がありました。

日本の子どもたちは「どれだけの知識をもっているか(覚えたことを書く能力)の評価は高いが、「未知の状況に対して自分で判断して行動することができるか(習ったことがないことに対応できる力)が弱い」という結果がありました。そして「自分で判断して行動する」ためには「情報を検索・収集し、選択・分析し、加工・統合して」(これはまさしく図書館を使って育つ力です)、「自分の考えを形成し、行動する」ことが必要で、それは生きる力につながり、日本の子どもたちに求められている力であるとの説明がありました。

揖屋小の学校図書館を使う授業では、小学校一年生からすでに情報検索のキーワードで上位概念、下位概念をとらえることを教え、図書館クイズやマップングなどを楽しみながら、本と出合い、学ぶ様子が見られました。学校図書館での授業はとても生き生きとしています。そこには受動的な学習者ではなく、能動的な学習者の子どもたちがいきました。「一人ひとりの学びを支える人がいて、子どもたちの学びが広がっていく」ことを実感しました。

八王子の学校図書館の制度はやっと始まったところです。専門資格を持った職員の配置がもつと進んで、八王子の子どもたちに学習する喜びと生きる力を届けたいと願います。

(田沼恵美子)

『空とぶ船と世界一のおぼか』

——ロシアのむかしばなし』

アーサー・ランサム作、神宮輝夫訳

ユリー・シュルヴィッツ絵
岩波書店



アーサー・ランサムのロシアの昔話の再話です。一九三〇年以降の『ツバメ号とアマゾン号』シリーズで、世界的な名声を獲得するまでは、ロシアの骨太な昔話に魅かれて、イギリスの子どもたちに、熱心にそれらを紹介していたということです。

ユリー・シュルヴィッツは、一九三五年ポーランドのワルシャワ生まれ。四歳で第二次世界大戦を迎え、ポーランドを脱出して各地を転々とし、一九四九年にイスラエルにおちついたそうです。「彼はなにごとについても、あやまった区別を排そうとする」また「対立するものを調和させ、調和のとれた絵の世界を創造しようとする」と、解説文にあります。人種差別、戦争という、苦難を味わった生い立ちを持っていました。田園の広がりとお城と豪華な食べ物に印象に残りました。

この『空とぶ船と世界一のおぼか』のおはなしは、ロシアの昔話の代表的なものだそうです。奇想天外で、たしかに「ほねぶと」なはなしといえます。「ぼかむすこ」「ぼかむすこ」としつこく、くりかえされるので、その点が耳障りですが…。かしこい息子よ「ぼかむすこ」が…、立派な紳士ではなく、「いなか

「教室での読みきかせ」会員のおすすめ絵本

ものたち」が…、だれにも等しく目配り、気配りする「神さま」自然の摂理によって、報われるのだというおはなしになっています。

『ちがうねん』

ジョン・クラッセン作、長谷川義史訳
クレヨンハウス

アニメと絵本の比較を、ある雑誌で読

んだところ。アニメでは、子どもが想像力を働かせる前に、絵が動きます。絵を動かすのは、アニメ作者の監督です。ズームアップして、子どもが自分で視線を向ける前に、そちらに誘導します。子どもは、おしゃべりしている間にも次の場面に、画面は進行しているの、黙って集中して見入ります。絵本では、ページのなかを、子どもの視線が走ります。探します。

この『ちがうねん』では、海藻のジャングルのところでは、小さい魚を見つけようと、必死になるでしょう。大きな魚は何をしたんだろうと、血眼になるでしょう。また表紙を見て、小さな魚にあつ！と声をかけるでしょう。だめなんだよ！やっぱり、そういうこと！と教えてやりたくなるでしょう。「ちがうねん」って、自分をごまかすことばだよ、って。一ページ、一ページとめくって行って、一枚ずつの絵は止まっているはずなのに子どもの目は、小さな魚のしっぽ、大きな魚の目つき、小さな帽子、大きな魚の頭…と泳ぎ回ります。おそらく、絵本の中の世界をも飛び出しよう。魚が泳ぎまわっている印象を心に残すことでしよう。

(元奥多摩町立氷川小学校司書 島崎滋)



もう四十年ほど昔のことだが今ほど児童書が出ておらずそのリストも少なかつた頃、ある書籍販売会社がすぐれた本を選んでセットにして普及することを考えた。児童文学に造詣の深い学者や実践家が委嘱されて選定作業をする事になった。ひよんなことから私も頼まれてその討論に参加した。ある打合せ会の席で戦前からの研究者であるK先生が「アーサー・ランサム全集をそのまま提供したらどうか」と言われた。アーサー・ランサムの本とは『ツバメ号とアマゾン号』に始まる十二巻ものヨットでの少年少女の冒険物語で、イギリス児童文学の傑作である（今は岩波少年文庫版になっている）。

私が賛成の声をあげるより早く実践家のS氏が「あれは古い国のよき時代の話だ。日本の子どもにすすめる必要はない」と応じた。K先生も、反対があれば固執しないといってその話題は消えた。だが私は今でも残念だ。時代と国が違えば作品の価値が薄れるものだろうか。

その頃、私の職場の先輩に休日にはヨットに熱中する人がいた。国際競技にも出ていたが小学生のためのヨット指導もしていた。この先輩が私の子ども文庫を知って話してくれた。『ツバメ号とアマゾン号』はいい本だ。江ノ島のジュニアヨットクラブでは天候で舟を出せないときなど、中学生が小さい子にこの本を読み聞かせていると。

読書は生活に結びつき、生活は読書から学ぶと

連載『ツバメ号とアマゾン号』から思い出すこと——志々目 彰

いい。ヨットの話を読んで海に憧れ、舟に乗ってみたい子が増えるのは、日本のように冒険が許されにくい国ではとても貴重なことだと私は思っていた。いまもそう思う。海のない八王子の子が『ツバメ号とアマゾン号』を読んだからと、スコットランドの湖水地方に出かけることはまずないだろう。しかし舟の揺らぎ、波のしぶきに憧れた子が浅川の水辺にたち、海と空の果てまで思いをめぐらすことがない誰にいえようか。本がもたらす空想の力とはそういうことではなからうか。そこから生まれ発展していくものは著者にも教師にも見えない。うけとる千差万別の子はそれぞれに相応しい滋養をくみとるだろう。授業時間ごとに、または学期ごとに評価できるものでもない。

読書運動の指導者といわれる人でも、物語の力を評価しなかった時代から年月は過ぎた。そして今が、よくなったといいきれるだろうか。

『ツバメ号とアマゾン号』

アーサー・ランサム作

神宮輝夫訳

岩波書店



活動報告 学校図書館見学会レポート

「学校図書館活用重点校 由木中学校の成果！」

一月二十八日(火)、八王子市立由木中学校に行きました。日本十進分類法によるサインもはつきり目立ち、きちんと整備された学校図書館でした。保護者ボランティアによる「おすすめの本」コーナー、図書委員による「受験に出てくる作品」コーナーなど特別展示の工夫もみられました。

由木中学校は、平成二十五年度の学校図書館活用重点校(以下、「重点校」と表記します)に指定されて、どのような成果をあげられたのかを知りたくて、私は見学にうかがいました。この見学を通して、私たちの目に見えた範囲での「成果と課題」をまとめさせていただきます。

◎成果…学校図書館が物理的に整備された・生徒の昼休み等の利用者が増えた・貸出し冊数が増えた

○課題…蔵書構成の充実・授業での利用・よりきめの細かなレファレンス(資料提供・読書案内)

一口に、「学校図書館の整備」といっても、だが、いつ、どのようにというプロセスをたどらなければなりません。由木中学校の場合は、まず、「重点校」の指定を受けます。そして、校長の英断があげられます。そして、職員の中に、学校図書館はかくあるべしという理想像が描けていました。司書教諭の大橋先生が大きな役割を果たしたと思います。

「図書委員の生徒がよくやってく



れます。」と大橋先生は話してくれました。図書委員会によるブックトークや先に述べた展示コーナーづくりなど、生徒のやる気を引き出す指導があつてこそだと思えます。

「展示、装飾などボランティアの方のお世話になっていきます。」と、ボランティアの方との連携も上手に取っているようです。そのなかで、月に一回のサポーターの巡回の機会には、その専門的指導をボランティアの作業に活用しているということでした。時間をやりくりし、生徒、ボランティア、サポーターなどの働きをコーディネートしたところに、由木中学校の整備の向上や生徒利用の増加というような成果がもたらされているのだと思います。

国語科の教師として、授業の單元の中にも積極的に学校図書館の活用を試みていました。ブックトーク新聞づくり、公共図書館の司書と呼んでの連携授業等、読書推進、探究学習への動機づけと、学習の基盤づくりになるのではないかと期待を抱かせる内容でした。

ただ、司書教諭として、他教科の授業へのかかわりには限界があるということは否めません。学校図書館の授業への活用という点では、そこは大きな課題ではないでしょうか。だからこそ、学校司書の配置が、望まれるのです。一日中常駐できるサポーターが派遣されるならば、他教科にも、学校図書館活用授業が広まるのが期待できるのではないのでしょうか。大橋先生自身、喉から手が出るくらい、来年度こそはサポーター(「学校司書」と言い換えてもいいのでしょうか)を派遣してほしい、と訴えていました。

(島崎 滋)

「重点校からサポーター派遣校へ、柏木小学校」

柏木小学校は平成二十四年度九月から導入された学校図書館サポーターが、今年度も引き続き派遣されています。

長年柏木小学校で司書教諭として活動していた当会メンバーの大島さんが一緒だったせいもあり、図書室の見学だけでなく、副校長先生や校長先生にもお話を伺うことができ、充実した見学会となりました。

管理職の学校図書館意識が高く（それはひとえに大島さんが学校図書館の重要性を考えボランティアの方とともに地道に活動を続けてきた成果と言えますが）、サポーター派遣の効果も充分意識されて次年度もサポーター要請をしていると伺い、ぜひともこの成果を広く他の小中学校に知らせてほしいと思いました。

図書室は一目で人の手が入っていることが分かるように、明るい雰囲気とおすすり本のコーナーや畳の絵本コーナー、整備された書架が好印象を与えていました。サポーターの方は今年度柏木小学校のほか上柚木小、愛宕小、上柚木中の四校かけ持ちで、その精神的負担は計り知れません。他市で「専門職」として10年の学校司書経験があればこそ、何とかこなせているのだらうなどご苦労を推察しますが、「まるで十年前にタイムスリップしたような仕事をしている」という言葉が印象に残りました。

八王子市は多摩市に十年も遅れているのだという危機感を多くの市民および教育委員会に考えてもらいたいです。

（手嶋 ゆかり）

「杉並区立済美教育センターを訪問して」

二月二十日（木）午前十時～十二時

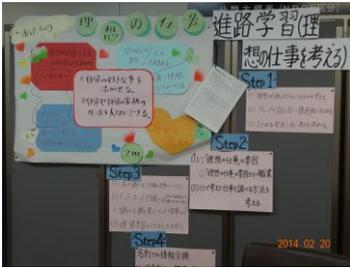
二〇一二年度に小中学校全校に学校司書の配置を完了した杉並区の見学会に参加し、学校図書館支援担当係長の佐川祐子さんからお話を伺いました。

杉並区では司書配置によって、見違えるように学校図書館の整備が進み、全く読書をしない子の割合は半減、調べ学習や教師の授業での利用、貸出の増加という大きな効果が表れています。

その要因は、教育委員会が学校図書館の充実を「子ども読書活動推進計画」や「教育ビジョン二〇一二推進計画」の重点施策に位置付けて、教育委員会に支援担当係長を置き、スタッフの非常勤職員とともに学校司書や教員、学校図書館への具体的な支援を行うしつかりとした体制があることです。本をよく知る図書館司書の経験と専門性、熱意のある職員がいることも大切だと感じました。

杉並の子どもたちにとつて、学校図書館に人がいるのは当たり前で、点数をつけない図書館は居心地が良く、多様な学びの場となっているようです。「八王子の子どもたちにも早くこの環境を！」と思った見学会でした。

（寄稿・井上睦子さん）



お知らせ

学校図書館見学会のように、本会では一人でも多くの方が学校図書館の充実に興味関心を持つてくださるような様々な企画をしています。来年度もまだまだ続きます。

七月 学校図書館井戸端会議パート3

九月 アーサー・ビナードさん講演会

十一月 広瀬恒子さん講演会

二月 他市学校図書館見学会

そのほか会員学習会も公開で行う予定です。

本会のホームページや広報紙でご案内します。

他市の情報など

■町田市立図書館

「第三回まちだとしょかん子どもまつり」

日時： 三月二十六日（水）～三十日（日）

会場： 町田市立中央図書館ほか

内容： おはなし会、ブックトーク、

広瀬恒子さん講演会、ビブリオバトルなど。

問い合わせ： 電話・ファックス 042 - 772 - 1243

町田市図書館HPでご確認ください。



■21世紀 かみしばい学校

日時：四月十九日（土） 十時三十分～十六時

「紙芝居の楽しみ・絵本の楽しみ」

講演「紙芝居を作る 絵本を作る」

スズキコージさん

実演 作家が演じる「出雲神話紙芝居」

長野ヒデ子さん ほか

会場：かながわ労働プラザ多目的ホール

主催：紙芝居文化推進協議会 080-5504-6168 /

児童図書館研究会東京支部

会員募集

正会員：…本会のすべての活動に参加できます。

入会金5000円、年会費10000円です。

賛助会員：…広報紙やイベントの情報をお届けします。本

会の活動を支援して下さる個人、団体の方。

年会費一口 10000円です。

編集後記

八王子に学校図書館を育てる会の事務局スタッフとして会の活動をリードしてきた島崎氏が逝去、本号は遺稿として預かっていた原稿を多く掲載させていただきました。会の活動はこれまで通りですが、今後とも皆様のご支援をよろしく願います。

関連して事務局アドレスが変わります。

lib804sodaterukai@gmail.com